

〈調査報告〉

アニマルセラピー講座を受講した学生の意識調査

堀 初 子*

An opinion poll of the student who took the Animal therapy lecture

Hatsuko Hori

I はじめに

我が国の現代社会を象徴するものとして、超高齢化を始め、人間性の希薄さ、情報過多によって生じるストレスの増加、日進月歩の社会環境の変化による精神の不安定な人の増加などがあげられる。同時に、心身を癒す方法・手段として、昨今「アニマルセラピー」という言葉がマスコミにも取り上げられ、目に、耳にすることが多くなった。

外国ではその歴史は古く、アニマルセラピーという呼び名も「ペット療法」「ペット活用療法」「動物活用療法」「ペット指向性療法」「ヒューマン・コンパニオン」「アニマル・セラピー」などいろいろ変化してきた。1980年代初頭、アニマルセラピー活動を支援するアメリカのデルタ協会は、アニマルセラピーを動物介在活動（Animal Assisted Activity）と動物介在療法（Animal Assisted Therapy）に区別した。動物介在活動（以下 AAA と記載）は、動物と人々とのふれあいを主な目的とする慰問活動であり、動物介在療法（以下 AAT と記載）は、医療従事者とボランティアなどが協力し、ゴールを設定して観察記録をとる治療行為である。

医療秘書コースの学生は、例年 90% 以上が医療機関に就職することを希望している。社会環境の変化とともに医療環境も激変し、学生た

ちの望む「病院での医療事務」という職種のみでの採用は少なくなっており、今後もこの傾向は続き、医療秘書の業務範囲は広汎になっていくものと考えられる。

そこで本コースでは、平成 18 年度から動物介在療法（アニマルセラピー）課程修了認定証を本コースの取得資格に加えた。学生が動物によって「癒される」ことを体験し、医療機関や施設で AAA を行うことなどによって、ボランティア精神を育み、より社会に貢献したいという意欲を高めることを目的としたものである。この認定証を取得するについては、必修科目として「動物の行動と心理」「動物管理学」「人と動物の関連学」「心理学」「医療学概論」を掲げ、共通教育科目系列の福祉教育科目及び学科選択科目系列の福祉とアニマルセラピー科目の中から合計 11 単位以上を取得し、実習にも参加することになっている。更に、19 年度から地域支援活動プログラムの一環として、外部講師とセラピー犬（NPO 法人日本アニマルセラピー普及協議会）によってアニマルセラピー講座を実施したが、地域住民の方と共に参加することを義務づけた。

AAT には、もっとも長い歴史がある乗馬療法を始め、イルカ療法、野鳥観察等いろいろある。介在に適する小動物にも、熱帯魚・小鳥・ハムスター・ウサギ・ネコなどがあるが、本コ

*関西女子短期大学 教授

ースでは犬を介在動物に選択し、ドッグセラピーを行った。その理由は、行動適性（行動予測がしやすく表情豊かで親しみやすい、動物がストレスを感じていることを認知しやすい）と公衆衛生的適性（人と動物との共通感染症が明確である）等を考慮したこと、さらに老若男女を問わず誰でも気軽に、比較的手軽に行なえるものと考えたからである。

ドッグセラピーを実施する前に、動物に対する意識や動物の飼育の現状、およびアニマルセラピーに関する知識等について調査を行ったのでその結果と、ドッグセラピー講座実施後に動物との実際の触れあいによる「癒し」を体感し、どのような意識をもったかなどについて感想文を書かせまとめたので結果を報告する。ただし、実際に施設等に出向き、AAT を実施するのは 10 月末に計画しているので AAT に参加してからの報告は次回に行う予定である。

II 調査対象及び方法

1. 調査対象と時期

調査対象は、保健科医療秘書コースの 1 年生 40 名、2 年生 43 名で平成 19 年 5 月に実施した。

2. 調査方法

調査日に欠席した学生を除き、本学講義室にて調査用紙を配布し、各項目につき説明した後、学生が無記名で記載したものを回収した。

3. 調査内容と目的

調査項目は①動物が好きかどうか ②何か動物を飼っているか ③好きなのに飼っていない人はその理由 ④アニマルセラピーという言葉聞いたことがあるか ⑤アニマルセラピーとはどんなことか知っているか ⑥アニマルセラピーを知っている人はそれによっていろいろな人の役にたつことをしたいと思うか等である。なお、調査ではないが動物介在療法（アニマルセラピー）課程終了認定証を取得する学生 1 年生 34 名、2 年生 22 名に地域支援活動として行ったアニマルセラピー講座終了後（6 月 23

日）、参加しての感想文を 1 週間以内に提出させた。以上の調査と感想文からアニマルセラピーに関する学生の意識を把握し、本コースの運営目標及び運営計画の参考としたい。

III 結果

1. アンケート調査の結果

1) 動物が好きですか。「好き」が 66 名 (79.5%)、「どちらでもない」が 15 名 (18.0%)、「いいえ」が 2 名 (2.4%) であった。(図 1)

2) 好きな人は何か動物を飼っていますか。「はい」が 37 名 (56.0%)、「いいえ」が 29 名 (43.9%) であった。(図 2)

3) なぜ動物を飼っているのですか（複数回答）。「可愛いから」31 名、「家族も好きだから」24 名、「やさしい気持ちになれるから」23 名、「家族間で共通の話題でコミュニケーションがとれるから」14 名、「寂しさがまぎれるから」10 名、「その他」6 名で「なでるだけで癒される」「その生態についていろいろ発見できるから」「捨てられていてかわいそうだったから」「もらった」などがあつた。(表 1)

4) 動物が嫌いな人の理由。「小さいときに犬に追いかけられた」1 名、「小さいときに犬に噛まれた」1 名

5) 動物が好きなのに飼っていない理由（複数回答）。「家族の中で反対する人がいるから」15 名、「世話ができないから」14 名、「今自宅に

表 1 動物を飼っている理由（複数回答）
(人)

可愛いから	31
家族も好きだから	24
やさしい気持ちになれるから	23
家族間で共通の話題でコミュニケーションがとれるから	14
寂しさがまぎれるから	10
なでるだけで癒されるから	2
その生態についていろいろ発見できるから	1
捨てられていてかわいそうだったから	1
もらったから	1

住んでいないから」4名、「飼う場所がない」「前の犬が死んでまだ日が浅いから」「家族に動物の苦手な人がいる」「死んだら辛いから」「父がたばこを吸うから」「動物アレルギーだから」が各1名ずつであった。(表2)

6) アニマルセラピーということばを聞いたことがありますか。「はい」70名(84.3%)「いいえ」13名(16.7%) (図3)

7) アニマルセラピーとはどんなことか知っていますか。「はい」64名(77.1%)「いいえ」19

名(22.9%) (図4)

8) アニマルセラピーを知っている人は、アニマルセラピーを学習していろいろな人の役にたちたいと思いますか。「はい」60名(93.7%)「いいえ」4名(6.2%) (図5)

9) 動物介在療法(アニマルセラピー)課程修了認定証を取得する予定ですか。「はい」56名(67.4%)「いいえ」27名(32.5%)

表2 動物が好きなのに飼っていない理由(複数回答)(人)

家族の中で反対する人がいるから	15
世話ができないから	14
今自宅に住んでいないから	4
飼う場所がない	1
前の犬が死んでまだ日が浅いから家族に動物の苦手な人がいるから	1
死んだら辛いから	1
父がたばこを吸うから	1
動物アレルギーだから	1

2. 4回の地域支援活動として実施したアニマルセラピー講座のうち座学に参加した学生の感想文から(原文のまま)。

- ・犬の生後2~3週間のころの、人・動物・環境に対する社会化が大切で、大きくなってから影響するということを初めて知った。
- ・食べ物はドッグフードよりも手間はかかるが人が食べておいしいと思う安全なものを作り、食べさせ水を多く飲ませることが大切だということがわかった。
- ・トレーニングとしつけはちがうことを知っ

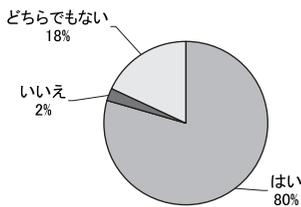


図1 動物が好きですか

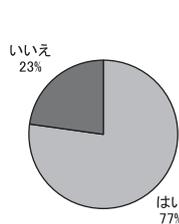


図2 何か動物を飼っていますか

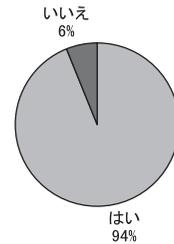


図3 アニマルセラピーという言葉を聞いたことがありますか

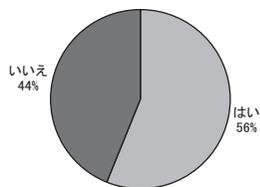


図4 アニマルセラピーとはどんなことか知っていますか

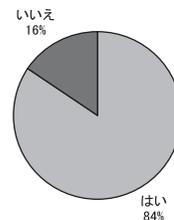


図5 アニマルセラピーで人の役にたちたいと思いますか

- た。
- ・しつけをするとき犬にも考えさせることをしなければならぬということを知り、驚いた。
 - ・オペラント条件付けの話は「動物の行動と心理」でも習ったが、とてもわかりやすかった。
 - ・車椅子の方と話すときはしゃがみ、視線をあわせ、正面ではなく斜め前に位置するようになるということを知った。
 - ・ドッグセラピーが身障者や登校拒否の子供や認知症の人に役立っていることを初めて知り、感動した。
 - ・犬にも人の気持ちがわかると知って驚いた。
 - ・西欧と日本の動物観の違いがよくわかった。
 - ・動物への虐待や放置は絶対してはならないと思った。犬が苦手な人や嫌いな人はたくさんいると思うが同じ場所に住んでいる限り人間に対すると同じ愛情をもって接することが大切だと改めて感じた。
 - ・講義を受けて、命の大切さを改めて考えさせられた。正しいしつけ方や関わり方を学び自分の子供ができたなら動物大好きな子にしたいと思う。
 - ・知らなかった犬の体の構造やストレスについて知ることができた。家の犬にも気をつけてあげたいと思う。
 - ・今回の講義や実習を無駄にしないよう今後何かの形で役立てたいと思う。
 - ・犬をしつけることは決してむずかしいものではないことを知った。教えていただいたことをボランティアなどで生かしたいと思う。
 - ・犬は人間にとって大切な動物だと思った。犬と関わることによって元気になる人はたくさんいると思う。
 - ・犬のことをまったく知らなくて暑がり人間といっしょだということを知った。
- た。犬にはあまり関心がなかったが今回受講して心から可愛いと思えた。
- ・犬に人間を癒す効果があるということを知った。
 - ・今回学習したことをお年寄りのために役立てたいと思った。そして動物介在療法についてももう少し深く勉強したいと思った。
 - ・犬の気持ちを人間が勝手に判断するのではなく、正しい知識で接してあげるべきだと思った。
 - ・アニマルセラピーにとっても興味を持った。
 - ・犬の秘められた力に感動し、活動にも参加したいと思った。動物が人に与える影響は大きくて、命の大切さを教えることに繋がっていくのだと思った。
 - ・人との交流が苦手な人の役に立てるようにもっとアニマルセラピーの力を知りたいと思った。
 - ・犬が目の前に来ただけで部屋の皆が笑顔になった。
 - ・アニマルセラピーのことをよく知らないで認定証を取得しようとしていた。いい勉強になった。
- 3. 4 回の地域支援活動として実施したアニマルセラピー講座のうち実習に参加した学生の感想文から (原文のまま)。**
- ・犬に関わることがないので最初恐かったけれど、どうすれば犬と仲良くできるか教えてもらい、そのとおりにしたら恐くなくて、とても可愛くて癒される感じがした。
 - ・しつけをちゃんとされている犬とされていない犬とのちがいがよくわかった。
 - ・小さいときから動物アレルギーといわれていたので最初そばにもいけなかったがあまり可愛いのでリードを持ってしつけをしたがどうもなかった。このような機会がなかったら一生犬を恐がり、触れることもなかったかもしれないし、勇気を与えてくれたのでとても感謝している。
 - ・犬嫌いの人には到底わからないと思うが、

そばにいただけで嬉しく、やさしい気持ちになる。

- ・小さいとき噛まれたことがあったのでさわれなかったけれど今日は触れて嬉しかった。
- ・犬は汚いと思い込んでいてさわれなかったけれど大丈夫だった。
- ・大きくて吠える犬は恐くて嫌いと思い込んでいた。今日は大型の犬ではなくて小型の犬にさわった。可愛くて思わず笑顔になって心が和んだ。これがドッグセラピーの力なのだと感じた。
- ・人が恐れながら触りに行くと犬も恐れることを知った。まちがった知識で今まで犬に接していたことがよくわかった。
- ・犬の目を見て撫でるだけで心が癒された。
- ・犬と触れ合っている自分が優しい気持ちに



図6 セラピー犬で犬のしつけ方を実習する学生



図7 セラピー犬で犬への接し方を実習する学生

なっていることに気付いた。

- ・犬がそばにいただけで体が自由に動かせない人でも犬を通じて他の人たちと会話ができるようになることを知り、犬の見えない力を知った。
- ・私が犬嫌いなのは親が近づけなかったからだとわかった。正しい知識で接すれば本当に可愛くて、大好きになった。子供ができたなら犬好きの子にしたい。

ま と め

1、2年生の約80%が動物好きであること、そのうちの56%が何らかの動物を飼っていることがわかった。そして飼っている理由として「やさしい気持ちになれる」ことや「寂しさがまぎれる」「なでるだけで癒される」などがあり、動物の介在によって「癒し」の効果を得ていることがわかる。動物が嫌いな学生の理由は「小さいときに犬に噛まれた」、または「追いかけられた」ということであった。しかし、このような学生も実習後の感想文から、犬に対する意識の変化が窺えた。動物が好きなのに何も飼っていない理由としては、「家族の中で反対する人がいるから」「世話ができない」「今自宅に住んでいないから」ということが多かったが、いずれも条件が整えば飼いたいという気持ちのあることが推測できる。「死んだら辛いから」という意見もあった。ペットの死を悲しむ飼い主の気持ちをペットロスという言葉で取り上げられているが、悲しみをきちんととらえ、乗り越えることが大切で人間としての成長に繋がると理解して欲しい。アニマルセラピーは比較的新しいことばであるが聞いたことがあり、その内容は正確なものではないにしても、知っている学生も多くいた。そしてアニマルセラピーで人の役に立ちたいと考える学生は93.7%であった。

感想文には、犬に対して恐怖心を持っていた学生や、関心のなかった学生は正しい接し方やしつけ方を知ることでずいぶん気持ちに変化が

あったこと、犬がいるだけで優しい気持ち、穏やかな気持ち、そして笑顔になれることを実感し、ボランティアなどで活動し、役立てたいと思ったことなどが書かれていた。またニマルセラピーを、まったく知らなかった或いは漠然としか知らなかった学生は、本講座を受講したことによって、いろいろな知識を得て理解が深まり、さらに実習ではかなり感動したようである。犬が人間に与える生理的効果¹⁾、心理的効果²⁾、社会的効果³⁾などを体感したものと考えられる。これからの高齢社会或いはストレス社会の中で犬がコンパニオンアニマルとして、またドッグセラピーとして大きな役割を果たすであろうことは充分予測できる。しかし、動物介在活動の対象になる人は、高齢者や入院患者、或いは療育施設のこどもたちであることから、懸念される人畜共通感染症⁴⁾やアレルギー問題、動物

のストレス (表 3-1・表 3-2) により起こる事故などのリスクがあることや、自分にとっては従順でかわいいペットであってもセラピーに参加できるペットは、日本動物病院福祉協会で定められた認定基準 (表 4) に適合していることなど、得なければならない知識や学習、クリアすべき課題は少なくない。

AAA は決して興味本位で行えるものでないことを心して、秋の施設訪問を実施したい。

注

1) 情動作用：扁桃体への作用により笑顔の表出などが活性化される。

自律神経系及び内分泌系への作用：視床下部への作用を介して、不安やストレスの軽減、血圧低下或いは免疫促進効果など。また代謝面への効果としてコレステロールの低下などがある。

表 3-1 動物のストレスの原因

ストレス要因	動物のストレスの原因
動物自身	肉体的な疲労など
環境因子	活動場所が新しい場所である場合 騒がしい場所や狭い場所 人や他の動物で混雑している場合 気温や湿度が高い場合 室温と屋外の気温差が激しい場合
訓練やハンドラーの問題	トレーニング不足 トレーニング方法の誤り ハンドラーによる不適当な取扱い ハンドラーが不機嫌である場合 ハンドラーがいつも違う人である場合

(田丸政男・戸塚裕久補完代替医療アニマルセラピー 2006 金芳社 p 23 から引用)

表 3-2 活動時における動物のストレス徴候

動物種	活動時における動物のストレス徴候		
各種動物の共通点	元気消失、不活発 過剰な行動、異常な泣き声		不機嫌、社交性の消失 下痢、嘔吐、食欲不振など
犬	肉体的変化	尾を振る 瞳孔が開く 頻繁にまばたきする 口の周りを舐める	耳と尾が下がる あくびを頻繁にする ハーハー息をする 唾液を垂らす
	行動変化	アイコンタクトを避ける 臭いを嗅ぎまわる	ハンドラーの後に隠れる

(田丸政男・戸塚裕久補完代替医療アニマルセラピー 2006 金芳社 p 23 から作成)

表4 (社)日本動物病院福祉協会の犬の CAPP 認定基準

<ul style="list-style-type: none">●認定基準Ⅰ [動物に対する基準]①正しい健康管理が行われている②見知らぬ人に会った時でも落ち着いていられる 知らない人が親しげに近づいたり、飼い主に話しかけたりした時でも落ち着いた態度でいられるかどうかを見る③他の動物に対して落ち着いて接することができる 他の動物に接近しても過剰な反応を示さず、落ち着いた態度でいられるかどうかを見る④人ごみの中でも落ち着いて歩くことができる⑤「オスワリ」「フセ」「マテ」「オイデ」ができる 飼い主の指示に従うことができるかどうかを見る⑥活動中に情緒不安定にならない 活動中によくありがちな刺激（ごちない触り方、他の動物を連れた人とすれ違う、本を落とす、車椅子が通る、杖が倒れるなど）に対して、落ち着いた態度でいられるかを見る⑦キャリーバッグやケージにおとなしく入り、おとなしくしている⑧みだりに排泄しない⑨飼い主とともに楽しく活動に参加している●認定基準Ⅱ [飼い主に対する基準]①人と動物の絆（Human Animal Bond）や CAPP 活動について、正しく理解している②他人に迷惑がかからない飼育をしている③CAPP 訪問活動に、2年以上かつ 20回以上参加している④(社)日本動物病院福祉協会の会員である

延命効果：心疾患などでは動物との同居が人の QOL を向上し、延命効果がある。

運動障害の改善作用：乗馬療法では動物の体温や振動による局所的な作用で、脳性麻痺、筋痙攣性麻痺などの症状の改善効果がある。

- 2) 自己認識の改善：動物たちは人に飼育されることから、人に自分が保護者の役割を担うという自信や自尊心を持たせるような自己認識の改善作用がある。

身体活動の促進：動物の世話を通して室内の生活から外出する機会が増え、身体活動及び社会的交流も増す効果がある。

意欲の高揚：乗馬療法などは障害者が自分の障害と闘う気力などを高揚させる効果がある。

情緒面の改善：動物が無条件に人を受け入れ、また裏切らないことから安心感が生まれる。犬などは喜びを体中で表現することから、感情の誘発効果がある。

- 3) 人と人との緩衝剤：見ず知らずの二人の人間が会話を始める場合の糸口に、動物の存在が重要な役割を果たす。これは動物が人の初対面の気まずさを緩衝することから「社会的潤滑剤」と呼ばれ、実際に自閉症などの治療に効果を上げている。

協調性の促進：人同士の会話の促進効果が生じその結果、協調性が増す。

社会的自立：盲導犬・聴導犬・介助犬などは障害者の社会的自立を促進する。

- 4) WHO（世界保健機構）が人と動物の間で感染しあう病気としているのは 122 疾患でそのうち日本国内で発症するといわれているものは約 50 種である。むやみに共通感染症を不安がる必要はないがアニマルセラピーの対象者は病人や高齢者、子供であり、免疫力が低下していることから清浄、清潔な動物を使用しなければならない。犬に関する人畜共通感染症としては、狂犬病・回虫症・包虫症・サルモネラ症・キャンピロバクター感染症などがある。

引用・参考文献

- 1) 岩本隆茂・福井 至「アニマル・セラピーの理論と実際」培風館、2006
- 2) 高柳友子・長谷川元、水越美奈、山崎恵子編「医療と福祉のための動物介在療法」医歯薬出版株式会社、2003
- 3) 田丸政男・戸塚裕久「アニマルセラピー」金芳堂、2006
- 4) 林 良博「検診アニマルセラピー ペットで心とからだを癒せるか」株式会社講談社、1999
- 5) 横山章光「アニマル・セラピーとは何か」日本放送出版協会、2007